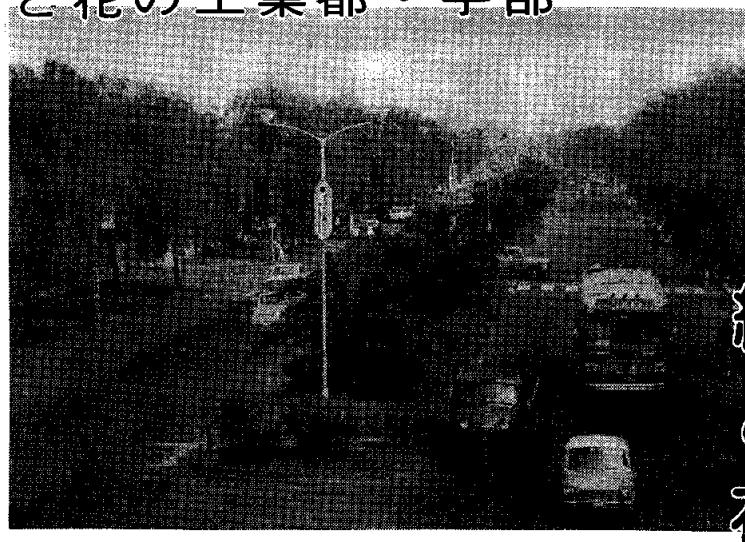
緑と花の工業都・宇部



山口県宇部市街

緑と花の街づくり

山崎盛司

昭和二十五年十月、私は宇部の市民になった。宇部の公園づくりに招かれたためである。東京を出て丸一日、汽車にゆられてはるばるときた宇部は、戦災の跡もなまなましい灰と灰色の町であった。

宇部は昭和二十年の戦災によって市街地の大半を灰じんと化したが、戦後いち早く復興した工場からは、煤じんが空をおおい、街にはその灰がふりそそいでいた。この頃の降灰量は、一ヵ月一平方キロ当り、工場地帯では百トン、市街地で平均六〇トンと記録されている。

「立ち昇る煙は都市発展の表徴だ」などと喜んではいられない。この降灰が、街の緑を枯死させ、木も草も花も育たない死の町、灰の町とした。そして、ここに芽生えたものは西部劇に見られるような暴力団の横行であり、青少年の不良化であった。

そして大小六〇余の炭鉱では、労働争議が相つぎ、街は赤旗で埋められた。降灰日本一という、有難くない折紙をつけられたのもこの頃である。とくに市民の緑化への関心はまったく薄く「木は植えても育たない、無駄なことだ」「街を緑化しても腹の足しにならない、無駄金を使うな」などという声が町を支配していた。

それは過去における、長い間の失敗体験から出た信念のようなものでもあった。

このような世論にうちかって都市緑化を推進してゆくためには、一度でも失敗は許されないし、いろいろな障害も覚悟しておかなければならない。そこで、つぎのような都市緑化事業を推進するための基本方針をたてて、われとわが心にいい聞かせた。

(1) 健康で明るく住み良い都市の建設は、都市緑化事業をおいてほかにない。私

たちは都市から失われた自然を復活し、都市環境を整備して、平和で明るい近代都市建設のために緑化事業の推進に挺身する。

(2) 緑化とは、木を植え木を育てることである。木を植える場所（公園・道路）を確保するとともに、木を育てる人と、育てる木を自からの手で生み出す。

(3) 緑化事業の効果は、最少十カ年である。長期計画をたて、その計画を着実に実行する忍耐と努力と勇気を培う。

(4) 都市緑化は一個人や一係ではできない。組織をつくるとともに、市民の理解と協力を求め、さらに進んで市民運動としての緑化運動を推進する。

この方針にそって事業をすすめる具体策として

1. 市営苗ほを造成して

(イ) 宇部を愛し、宇部を育てる造園技術者を養生する。

(ロ) 植栽樹木の研究調査を行ない、煤煙や潮風や干害に堪える樹種を選定する

(ハ) 街路と公園用樹木を育成する。

2. モデル緑化地区を定め、重点的に施行する。

3. 造園相談所を開設して、市民との対話をはかる。

4. 市民へのPRを積極的に行なって、緑化への理解と協力を求める。

5. 市民運動をおこし、町ぐるみの緑化態勢をつくる。

…

この具体策に沿って、昭和二十五年十二月に市内の公園予定地約一ヘクタールを確保し、ここに市営苗ほを開設した。具体的にはこの年の公園緑化の全予算五十万円を投入して、この地にあった公衆便所を改造して事務所をつくり、失対人夫五人を借用して市有林からこの地方の郷土植物で公園緑地に使用できそうな常緑や落葉の喬木、灌木など、約百種類六千本を掘りとって苗ほ周囲に植栽した。

さらにヤナギ・五千本、プラタナス、ポプラ各々千本、マサキ一万本、夾竹桃二千本の挿木を行ない、センダン、ユーカリの種子をまきクロマツの幼苗三千本を植えた。

この苗ほは、つぎつぎに公園緑化用樹木を育成するとともに、現在までに五十余名の造園技術者を養成し、宇部市の公害や気候風土に適する樹種の選択や、花いっぱい運動の苗の栽培から、市庁舎内で利用する鉢植用の草花の栽培まで、灰色の町から緑の町へと宇部市が発展した緑化事業や、緑化運動の推進母体となった。

現在では市内の公園や街路樹の建設、管理を担当する公園事務所もでき、三〇名の職員が常駐している。

なおいま宇部市には、この市営苗ほのほか、街路樹専用苗ほと常盤公園専用苗ほの三カ所があり、合わせて六ヘクタールの面積を有し約十万本の樹木を育成してきた。

モデル緑化地区の建設

工場の煤煙や降灰、瀬戸内海特有の潮風、炭鉱の廃土で埋めたてた劣悪な土地、殺伐たる気風、無理解、非協力、こんな環境の中で緑化を進めることは難事である。

しかし、樹木の選択や土質の調査もできた。人と木の養成もできた。そこで昭和二十六年の春から、モデル緑化地区の建設にとり組んだ。

(イ) 市のメインストリート常盤――平和通りの緑化。

幅員五十メートル、延長千三百メートル、中央に二条のグリンベルトを有したこのメインストリートは、当時の宇部市にとっては、飛行場の滑走路をつくったと騒がれたほどひろびろとしていた。この大通りの街路樹と緑地帯の造成は、翌年の二十七年まで二カ年をかけて完成された。工事費は僅か百万円足らず、作業員は十二、三名であったが、私たちはこの工事に宇部市の緑化事業の運命をかけ、情熱をもやし心血をそそいだ。

街路樹一本の植栽にトラック一台の客土を行ない、緑地帯の主木に用いた貝塚伊吹は、四十キロも遠い山にはいり、天幕で一週間も露営しながら掘りとってきて植えた。

小さい木を大きく育てよう。というわれわれの方針と予算の関係もあって、親指大の小さなプラタナスが街路樹街として植栽されたとき、市民の批難は爆発した。街路樹は折られたり切られたり、緑地帯のヒマラヤスギや唐シュロは、引き抜かれて道路に投げつけられた。一晩のうちに二十本、三十本と、このような被害にあうことは毎日のようにつづいた。

引き抜かれたら植えかえろ、切られたものや折られたものはとり換えろ、木を植え木を育てることはわれわれの仕事だ、腹をたてるな、根くらべのつもりでやろう。私たちは朝のまだ暗いうちからはしりまわって補植をし、植え換えた。引き抜かれたら植え、折られればとり換え、そして私たちはついにこの根くらべに勝った。市民の批難は月日とともに薄らいで、私たちへの協力者は次第にふえてきたのである。

いまこのメインストリートは、宇部市のシンボルとして市民自慢の街路となっている。さらにこの二十六、七年には二つの児童公園と河畔緑地の造成から、公園墓地の造成まで行ない、昭和二十五年当初、僅か

五十万円の緑化予算が二十七年には四十倍の二千万円とふえ、職員や作業員の数も増加した。

㊐ モデル地区の第二号は市街地の中心に造成された児童公園で、ここは墓地を移転して公園化した。いま、もっとも利用価値の高い児童公園となっているが、私たちはここで墓地の移転や石垣の築造など、石工の技術を体験した。

㊏ 第三号は大公園としての常盤公園の造成で、昭和三十年に計画をたて三十二年に事業に着手し、いまも工事をつづけている。第四号は市の中心駅の駅前広場の造成で、ここにはフンダンに緑地をとり、森の駅前広場として完成した。

いま、私どもは緑化の専門家として、市民の絶大な信頼を得ている。そして会社、工場の緑化をはじめ、市民の家庭緑化も旺んとなってきた。宇部でも木は育つ、木を育てるためにこうすれば良い、という方法を、私たちはこのモデル緑化地区の造成によって示すことができた。

そして何よりも大きな収穫は、緑化事業への市民の無理解が協力になり、いまでは町ぐるみの緑化運動へと発展したことである。

昭和二十八年にはこのメインストリートの緑化の功績をかわれ、宇部市は緑化功労者、そして全国初めての建設大臣の表彰をうけた。さらに二十九年には待望の公園係が新設され、ついで三十四年には全国で十三番目、人口二十万以下の都市でははじめてという公園緑地課も誕生し、課長以下四十名、年間予算も三千余万円となり、ここに念願の、独立して都市緑化事業ととり組める態勢がととのった。

現在公園緑地課は職員数六十八名、年間予算四千九百万円、二十八カ所の都市公園と十三カ所の緑地、三十カ所の児童遊園地に一万二千本の街路樹の管理をしている。

造園相談所の開設

造園相談所を開設したのは昭和三十四年十月で、これは課の新設を契期に設けられた。この相談所は市民への緑化思想を啓蒙するとともに、庭のつくりかた、木の手入れ法、花のつくりかた、病虫害の駆除など家庭から会社、工場、学校などの造園やその管理についての相談に応じようというもので、全職員がこれを担当している。

公園や並木の手入れをしながら、あるいは役所へきたついでに——、などの相談から、工場緑化や学校緑化の計画や指導の依頼など、その範囲は広い。

都市の緑化は公園や街路樹だけでは完成されない。市街地と同じ面積を有する工場緑化から学校、会社、家庭などの緑化こそ大切であって、これらの緑化には積極的に指導や相談に応じようというわけである。

最少の経費で最大の効果をあげる方法、そのためにこの造園相談所の果たしている役目は大きい。

市民へのPR

都市緑化は前述したように、市の単独事業では完成しない。会社、工場、学校から各家庭までその範囲は広汎であるが、これら町ぐるみの緑化を進めてゆくためには、緑化思想の普及が大切である。幸い宇部には、二つの強力な地元新聞がある。私たちはこの協力と市の広報紙や課の月報を通じ、あらゆる機会をとらえて緑化の必要を強調してきた。

いま、市内では街路樹一本、花壇の花一つ、折ったり盗んだりする人はいない。とくに、児童公園の清掃管理や街路樹の落葉処理など、進んで協力する町内会や子供会がふえ、かつての無理解、非協力な市民はいまはまったくいない。

市民運動をおこす

都市の緑が市民の健康と、豊かな生活のために大切な要素であり、施設であるという考えは、いまの日本にはまだ少ない。それは、西欧先進諸都市に見られるような広い公園や美しい並木が少なく、公園が市民共通の広場であり、並木が都市の情緒を醸し、豊かで快的な都市生活を享受するまでになっていないからであろう。

また、市民性の欠如と公衆道徳の低さもあげられる。わが国の都市は、個人主義の基盤に立った、いわゆる個人の集合体で、そこには市民としての連帯性も責任感も少なく、そのうえに公衆道徳はいちじるしく低下している。

したがって、市民であるという誇りも認識も薄く、愛市や郷土愛の思想も低い。とくに急速に膨脹した工業都市では、その感が一層強く感じられる。

わが家の清掃や清潔には敏感で、チリ紙一枚、マッチ棒一本散らさないご婦人や紳士でも、一度町や公園に出ると、チリ紙は散らし放題、マッチ棒やタバコのすいがらは捨て放題というのが現状である。これでは住み良い都市の建設はおろか、健康で平和で豊かな都市環境の整備はむずかしい。

現代の都市にもっとも必要なことは、みんなの町を、みんなの手でという連帯性と公衆道徳の高揚であろう。市民運動は、市

わが国主要都市の公園と街路樹

主要都市とは、公園緑地担当部課の設置都市をいう。公園とは都市公園についてのみいう。

	都市名	人口	面積	公園の数・面積・予算 既公園設置	公園面積	40年度予算	人口一人当り公園費	公園一人当り面積	街路樹数	人本当りの数	公園係人数
		人	km²	ヶ所	ha	千円	円	m²	本		人
1	東京	10,766,000	569	537	786	3,218,006	299	0.73	58,073	200人／0.005	1,397
2	大阪	3,156,230	202	272	318	1,466,055	464	1.01	20,972	143人／0.007	431
3	名古屋	1,935,430	312	191	301	721,759	373	1.55	30,263	63人／0.016	316
4	横浜	1,814,492	405	192	170	429,296	237	0.94	29,898	63人／0.016	171
5	京都	1,364,910	610	182	136	98,398	72	0.99	51,754	26人／0.038	43
6	神戸	1,219,897	530	156	284	309,810	254	2.33	12,200	100人／0.010	138
7	北九州	1,042,389	456	265	318	128,564	123	3.05	12,135	100人／0.011	137
8	川崎	860,799	133	110	159	344,144	391	1.85	5,683	143人／0.007	72
9	福岡	762,000	240	66	160	49,382	65	2.10	5,557	143人／0.007	60
10	札幌	642,049	1,008	55	150	76,565	119	2.3	6,185	100人／0.010	80
11	広島	524,558	430	56	102	57,105	109	1.94	8,000	66人／0.015	34
12	尼ヶ崎	500,977	48	90	123	31,328	63	2.46	3,400	143人／0.007	43
13	仙台	497,982	236	38	90	292,872	588	1.81	4,150	125人／0.008	71
14	堺	466,311	123	37	83	147,347	316	1.78	13,600	34人／0.029	57
15	熊本	418,558	145	43	77	27,139	65	1.84	2,208	200人／0.005	31
16	長崎	408,131	206	44	123	32,667	80	3.01	3,088	125人／0.008	50
17	姫路	379,765	240	31	92	185,818	489	2.42	1,846	200人／0.005	23
18	岐阜	358,130	195	47	69	32,252	97	1.92	1,806	200人／0.005	42
19	千葉	341,071	159	37	39	122,959	361	1.14	4,058	83人／0.012	32
20	和歌山	331,752	204	53	89	41,544	125	2.68	2,470	143人／0.007	46
21	鹿児島	330,976	181	66	140	54,457	164	4.23	7,491	43人／0.023	21
22	岡山	291,825	153	47	106	19,333	66	3.63	6,400	45人／0.022	23
23	松山	267,446	242	11	80	50,937	190	2.99	2,798	100人／0.010	50
24	佐世保	247,069	249	38	42	12,272	50	1.70	3,748	66人／0.015	11
25	甲府	168,363	170	7	6	37,103	220	0.30	313	500人／0.002	43
26	宇部	158,985	202	28	173	46,226	290	10.90	10,900	15人／0.068	65

563都市＋757町＋21村＝1,341都市計画法　法適要都市町村

◦都市人口1人当り公園面積

ワシントン（アメリカ）	45.2m²	シカゴ（アメリカ）	7.9m²
パリー（フランス）	8.9m²	チューリッヒ（スイス）	6.4m²
ニューヨーク（アメリカ）	11.9m²	ロンドン（イギリス）	9.2m²
ウイーン（オーストリア）	26.7m²	フランクフルト（西独）	9.1m²
アムステルダム（オランダ）	11.4m²	モスクワ（ソ連）	10.9m²

◦備　考

1. この資料は、昭和41年4月20日第8回全国都市公園担当部課長会議資料より抜すいしたもの。
2. 配列人口順　3. 公園担当課設置都市のみ　4. 札幌、岐阜、松山は昭和37年度の資料による。

民の市民意識と連帯性を育くみ、お互いに秩序を守り、公衆道徳を重んずる風習を培ううえに効果がある。

(イ) 花いっぱい運動

宇部市の花いっぱい運動は、煤じん防止の宇部方式とともに、花いっぱいの宇部方式といわれている。その要点をあげると、

花いっぱい運動を花壇コンクールと一鉢運動花まつりという方法で推進し、春秋二回のコンクールを同一種類の花で、町中の人びとが参加し、実施しているということである。すなわち花壇コンクールは

。二十人以上のグループで三十平方メートル以上の花壇を有し、春秋二回のコンクールに参加する団体であること。（参加資格）

。花壇コンクールはこれを(A)―町内会、子供会、商店街、(B)―会社、工場、停車場、(C)―小学校から大学まで、(D)―婦人会の四グループに分けてコンクールを行なう。

。コンクール参加団体には、花苗とその肥料を配布する。

。花の種類は全市で統一する。春はキンセンカ、秋はサルビヤ、マリゴールド、道路花壇はカンナ。

。春秋二回の審査を行なう。

現在この花壇コンクールに参加している団体は百三十二団体で、市で育成する花苗は、春花壇用三十万本、秋花壇用五十万本である。

一鉢運動花まつりは、土地のない商店街やアパート住いの人びと、二十人以上のグループの作れない老人たちが鉢植えの花でコンクールを行なおうという方法で、この場合も花や鉢を定め春と秋の二回、審査して表彰している。現在、五千人の参加。

このほか主な市民運動とその成果は、

(ロ) 町を彫刻で飾る運動

昭和三十六年十月におこり、現在までに全日本彫刻展を四回開催、町に飾られている彫刻は四十点。

(ハ) 市民の森造成運動

昭和三十七年三月におこり、二十七カ所の市民の森に三、四九一本の樹木が植えられた。

(ニ) 香りの森市民運動

昭和三十九年六月におこり、現在七カ所の香りの森ができている。

(ホ) 明治百年記念造園

昭和四十二年五月におこり、四十三年四月に終わる。募金額、百八十七万円、三十六カ所の森に五千七百本の樹木を植栽した。

などがあり、住み良い町はみんなの力で、という、町ぐるみ緑化運動はいまようやく軌道に乗ってきた、といえよう。

「緑と花の工業都」は、宇部市の誇るキャッチフレーズだが、かつて灰と灰色の町もいまでは緑と花の町として、市民は胸をはって「おらが町宇部」を自慢している。そこには郷土を愛し、町を美しく、心も美しくしよう、という市民意識と公徳心が、豊かな緑に育くまれている。

自然は私たちに、平和と健康と豊かな情緒を与えてくれるばかりでなく、人間性と無限の可能性を与えてくれるであろう。降灰の町から、緑と花の町をつくる。それはいまの宇部市民に課せられた使命でもある。

（宇部市公園緑地課長）

〔註〕

(1) 宇部市の公害対策は昭和二十四年、市議会の特別委員会の中に「宇部市降灰対策委員会」を設け、降灰防止活動に着手したことにはじまる。それから十九カ年、この委員会は昭和二十六年「煤じん対策委員会」三十五年に「大気汚染対策委員会」と発展し、現在も活発な活動をつづけている。

この委員会は市と市民と工場主の三者が一体となり、これに学識経験者を加えて、加害者、被害者という立場でなくて、大気汚染から市民を守るという主旨のもとに、その対策を話し合っている。現在、委員は市議会議員八、学識経験者四、関係事業主一〇、合計二十二名からなり、市長の諮問機関となっている。

昭和二十四年から四十二年までにこの委員会が設置した降下煤じんの測定器と、亜硫酸ガス測定装置は、それぞれ二十二カ所であり、工場側が設備した集じん装置は、コットレル三十、サイクロン十五、計四十五基で、整備費の累計は十六億八千六百万円となっている。

この結果、市内の煤じん量も昭和二十五・六年の月平均（一平方キロ当り）六〇トンから、現在ではその四分の一の十四・五トンと減少してきた。

(2) かつて「灰の町」のいわれた宇部が、昭和二十五年、緑化事業をはじめてから今年で十八カ年、いまでは都市公園も三〇カ所、面積一七五ヘクタールで、市民一人当りの公園面積は十一平方メートル、街路樹は一万一千八百本で、市民十二人に一本となっている。

別表は昭和四十一年におけるわが国主要都市の公園と街路樹の実態だが、この表を見ても、宇部の緑化が短日時の間に急速に伸びたということが、わかるであろう。